

7 漸増傾向を見せる北海道と東北

北海道と東北地方は、残念ながら実践園の数はまだまだ少数といわなければなりません。北海道ではっきりと石井方式をかかげて実践を行なっているのは、苫小牧市の駒沢苫小牧幼稚園だけのようですし、東北では、おそらく宮城県内にある10園近くの幼稚園だけではないかと思われます。

駒沢苫小牧幼稚園は昭和56年から

駒沢苫小牧幼稚園は、駒沢大学の関連法人として、昭和50年に、苫小牧駒沢短期大学、同大付属高校キャンパス内に開園した幼稚園。石井方式採用の動機は、教育目標にある「健全な身心の発達を促し、明るく素直で、人として基本的な習慣を身につけ、たくましく、創造力のある子に成長するよう努力する」ということをさらに実質的に達成しようとして、全職員あげて石井方式を研究、石井先生の指導を受けた結果、教育目標の達成のためにも「ぜひやってみよう」との結論に達して、遂に導入を決定したといえます。

実践方法は、まず環境の整備ということで、保育室の窓、黒板、鏡などあらゆるものを漢字で示し、道具箱、棚、下駄箱等の園児名もすべてひらがなから漢字に改め、万年カレンダー、文字の絵本を作成し教材として使用、その他、日常生活のなかで、何か説明を要する時

は、漢字かな混り文で書き出す、という具合に徹底した漢字指導を行なっているということです。

と同時に、園児の父母、あるいは地域の人々に対しても漢字学習への理解を求め、石井先生に公開授業と講演を行なってもらうなど、努力を積み重ねてきました。そのせいか、近くの小学校では、一年生の名簿が、ひらがなから漢字に変わったという報告も届いているほどで、ここでもまた小学校への影響が出て来ているようです。

子どもたちもまた、名札を見ながら名前を漢字で書こうとする。わからない漢字が出てきても、前後の文から推理して読み、仮に読み方が違っていても、意味は通じるように読んでしまう。文字以外のことでも、図式することで理解できる子が出てくる。などと、子どもの思考力の伸展には目をみはるものがあり、漢字遊びに楽しみを覚え、積極的に参加してくるようになったということです。

ここでは、後に述べるように(334頁)、卒園児たちのための「国語教室」を開いて、漢字学習の浸透をはかっています。

宮城県は東陽幼稚園を中心に

北海道から一転して東北へ目を移しますと、何といたっても宮城県が、石井方式の実践が最も盛んであり、その中心として活動を担っているのが仙台市の東陽幼稚園といえるでしょう。

この東陽幼稚園では、石井先生との出会いを、自ら“衝撃的”であ

ったという佐藤和丸園長が、文字通り、先陣を切って指導に当たっています。鶴ヶ谷のマンモス団地内にあり、7クラス、約280名の園児と、10名の先生を力強く牽引し続ける佐藤先生は、本書編集部に一文を寄せてくれました。長くなりますが紹介させていただきます。なお、307頁のカットは、佐藤先生自らが、教壇に立つさまを、自分で似顔絵風に描いてくれました。先生は絵画の指導も行なっているのです。

「漢字は複雑なほど幼児にとっては覚え易い。人間だってそうです。複雑な顔の人ほど、特徴があればあるほど忘れませんね」

ここまで石井先生がおっしゃると、会揚をうめつくした親達は一斉に私の方を見た。石井先生もそれにお気付きたり「そうそう、ここにいる和丸先生なんか特徴があり過ぎて、一度会ったらもう絶対に忘れないでしょう」

これで一同大笑いとなった。

何でもそうだと思うが、新しい試みをする場合、準備期間をにおいて段々充実させて行くという方法は結局実を結ばずに終わってしまうようだ。

我が園で漢字教育を採用する時もそうだった。昭和54年の夏に伊東温泉で石井先生と衝撃的な出会いがあり、その秋にはもう先生を我が園にお迎えして講演会まで開いた。そのあつすぐ「漢字のフラッシュカード」や「学習漢字園解辞典」「漢字の教養」を姉妹園3園を含

めて全26クラスに配置した。クラスで自由に使いたい時に使うようにと理事長から説明があった。種々クラスで試みたのはその内の十クラス。我が園だけであった。他の園の職員は批判もせず疑問も持たず埃をつけたまま放置しておいた。幼児もそうだが、大人でさえ自由にということのような結果になる。

年が明け、55年4月から強制的に“やらせる”ことにした。これで軌道にのり出し、結局創意工夫のできない職員は自ら姿を消して行った。それでよかったと思った。幼児は成長を止めて待つてはくれないのだ。我々が暗中模索をしている内にもどンドン頭の中で膜を作り始め、天才的に働く記憶力思考力を封じ込めてしまうことを考えたら、職員を説得し教育している暇はなかった。やる気のある者だけ残れ集まれという感じだった。親の方は戸惑いを感じながらもよく幼稚園の方針を理解し、信頼をよせてくれたので、波風はたたなかった。導入方法がうまかったのだと自負している。

それよりも何よりも、漢字に興味を示し、読むことの面白さを誰よりも子供自身が一番先にわかったということが普及の原動力となった。

我々はまず教室中を漢字だらけにすることから始めた。フラッシュカードをコピーし、物の名称として貼り付けた。父の日や敬老会にはそれに相応しい論語を選んで一斉に読ませた。参観していた父親や祖父母から思わず拍手がわいたクラスもあったという。園児へのお土産も「俳句漢字カルタ」や「諺カルタ」をあげるようになった。「学習漢

字図解辞典」や「漢字カード」も個人で購入する家庭がふえた。

ここまでくれば、もうあとは内容の充実だけであった。内容の充実といっても、いとも簡単で、なるべくたくさん漢字を見せればそれで済む。つまり言葉のひとつとして「見る言葉」である漢字をただ表記しておくだけでいいわけだ。読もうが読むまいが必要な時にカードを出し、或いは黒板にどんどん書き出し、指差しながらいつもの通りお話をするだけのことである。教えようとしないうちほど子供達は覚えてしまう。これが不思議だった。逆に教え込もうとすると駄目で、拒否さえする。この辺の何気ないテクニックだけは与える側が会得しなくてはならない。更に教師自身が語彙を豊富にし、はっきりした口調で優しさと気魄で子供達に臨まなくてはならない。

絵画の時間、導入の際にこの「見る言葉」はすごい威力を発揮する。お父さんお母さんの顔をかく時などは勿論のこと、初めて水彩絵の具を使わせる時の絵や、何とボディペインティングの時まで、私は綿密な配慮のもとに脚本を書き、提出漢字も選び出して教師に手渡す。それを各自が読み、更に自分でアレンジして毎回大成功となる。実演する教師自身が驚いている。

近隣の幼稚園で絵画の研究保育があり公開した。お話を聞いてそのイメージを絵にする授業だった。「チビクロサンボ」のお話だった。帽子の色や傘の色など、その先生はこれまで何日も子供達に話し続けてきた。お話の内容が子どもの心に残るようにと大変無駄な努力を

していた。案の定、公開当日のお話には子供達は全然関心を示さず、わざと別の色を言って先生を困らせていた。出来上がった絵は一番つまらない場面、サンボが散歩している絵がほとんどだった。授業のあと自評と質疑応答があった。私も“俄助言者”となり、助言を求められた。

「あなたはこの物語のどこが山場で、どこを子供達にかかせようと意図していましたか」

「さあ.....、全然考えていませんでした」

「それでは、アフリカの話や土人の話、虎の生態、ジャングルに繁る樹木、バターやチーズについて事前に図鑑などで教えましたか」

「いえ、全然教えませんでした。ただ同じ本を何度も読み聞かせれば子供達がそれを記憶して

かき易いのではないかと思い、ただただ繰り返しました」

この絵画指導に教師の手杖は何ひとつなかった。適切な指導を施していなかった。

漢字を使って話すように助言した。

その場では彼女達は納得したようだった。しかし、この漢字による導入法をすぐ現場で使っていないことがすぐわかる。何故なら、その威力に驚き必ず私のところに電話がはいるに違いないからだ。やはり、漢字だけが持つこの素晴らしい“資質”を理解しようとしなければ、使ってみようとしめないのだろう。あの時の助言でピンとくる位だった

らあのような指導などしているわけがなかったかも知れない。

私は今、二歳から小学校六年生までの子供達を270名ほど絵画教室で教えている。導入には必ずこの漢字を使う。勿論、子供達は何の抵抗もない。ごく当りまえとしてうけとっている。他県の幼稚園から保育を依頼されても、三歳だろうが四歳だろうがかまわず黒板を漢字でうめつくす。抵抗を示すのはその様子を見ている幼稚園の教師達だけだ。教師を相手にせず、子供達に直結した方がいい。

「子供達よ、言葉を目で読み取れ！」

この言葉を心に念じながら私はいつも子供達の前に立つ。

以上が佐藤先生の書いた“わが実践記録”とでもいべき一文です。文中に姉妹園3園とありますが、これは、いずれも仙台市内にある東盛、東盛第二、東岡の各幼稚園のことで、3園とも佐藤先生の努力が実を結び、漢字学習を実践しています。

佐藤先生はまた、石井方式の普及活動にも熱心ですが、今のところ近辺では、1園が採用に踏み切ったところで、「どうも各幼稚園の“上の方”に理解してもらえず、伸び悩みといったところです。園長、主事クラスの姿勢が消極的です」と残念がっています。また、近隣の幼稚園に限らず、他県からも見学者が東陽幼稚園へ年に何回か来るそうですが、重箱のスキをつつくような評価をする人もいたり、こちらもいささか問題ありといったところ。もちろん佐藤先生は、だからとい

って指をくわえて見ているわけではないそうですから、今後の活躍を大いに期待して良いでしょう。

仙台市内では、東陽幼稚園のほか、第一ひろせ、第二ひろせの2つの幼稚園でも、あわせて220名余りの園児たちが、4、5年前から漢字学習を実践中です。音感教育とともに、この両園の教育の大きな柱を形成していますが、やはり、知的能力、思考力の向上に非常にプラスになっているようで、卒園生の通う小学校でも、その2点と、子どもに自主性が高いという面が評価されているといえます。ただ、小学校の先生のなかには、そういう子どもたちをうまく受けとめることができず、「やりにくい」といった声があるとのこと。

仙台市には私立の幼稚園が約100園あります。前出の幼稚園を含めて、石井方式実践園は1割に満たない数です。仙台以外の宮城県内では、古川市の古川まこと幼稚園、柴田郡の熊野幼稚園が目につく程度です。それでも、石井方式が“東北地方に根をおろすことはないだろう”との、一方的かつ偏見に満ちた評価は、もう完全に間違いであり、破棄すべきものになったといい切れるでしょう。